



社会的公正を実現するキャリア支援を提唱する。たとえば、配偶者からのDVを受けた女性は、いくつかの社会的支援を受けるが、最後に重要になるのは「自分の将来」であり、具体的には仕事を探すことであると言う。

本書では、社会正義のカウンセリング論の実践法として①深い意味でのカウンセリング、②エンパワメント、③アドボカシーを挙げる。①については、個人の悩みとして聞くのと同時に、組織・制度・社会の歪みとして捉えること、②については、問題そのものを解決するのではなく、「問題を解決する手段」を提供すること、③については、セルフアドボカシー（クライエン

著者は、不安定就労、格差、貧困、外国人、性的少数者など、社会の縁辺で苦しむ人々のため、社会正義の

下村英雄 著  
2970円 図書文化社  
03-3943-2511



**社会正義のキャリア支援**  
個人の支援から個を取り巻く社会に広がる支援へ

ト自ら交渉し、説明し、改善することを支援する。クライエントアドボカシー（クライエントのかわりに代弁、説明、交渉、システムズアドボカシー（組織・制度・社会全体への介入↓組織改革、組織開発）を挙げる。

著者は、「一人一人の支援をしているだけでは、とても乗り越えられない壁がある」と言う。多様で多文化な個人の特徴や属性を尊重する面は重要であるが、この個人尊重、個人重視の論理では、個人を結びつけ、統合し、協力するという考え方は生まれてこない指摘する。

そして、「少数派の周辺の文化を尊重するという価値」を普遍的な価値として掲げるよう提唱する。評者は考える。学校教育の相談業務においては、個人との1対1の面談で終わりがちだが、もっと卒業後の人生や、社会に広がった視点から個人の悩みを捉えることも必要なのだろう。

（前聖徳大学教授・西村美東士）